

清泉カトリック センター便り

第17号
平成27年
6月30日

【編集・発行 カトリックセンター】

今月のみことば

神が御子を世に遣わされたのは、世を裁くためではなく、御子によって世が救われるためである。

(ヨハネによる福音書3章17節)

6月は聖心(みこころ)の月です。



教会暦では聖霊降臨祭から19日目を聖心の祝日としています。イエスの聖心(みこころ)とは、イエスの心臓を意味すると共に、イエスの愛を意味しています。

事を次のように記しています。

「兵士の一人が槍でイエスのわき腹を刺した。すると血と水が流れ出した。」(ヨハネによる福音書19章34節)

イエスの血は、世にいのちをもたらす為に捧げられた償いの血であり、水は泉のように神のひとり子であるイエスからわき出る聖霊を意味していると解釈されてきました。教皇ピウス11世は、その回勅『ミセレンティッシムス・レデンプトル』(一九二八年)において聖心(みこころ)における償いの意味を強調し、後の教皇回勅にも引き継がれています。

清泉女学院の校章の左には聖心(みこころ)が置かれ、それをとりまく鎖によって神の子として「人間の相互愛と共同体意識」があらわされています。

本学院の設立母体である聖心侍女会のシスターズはその会の名が示すように、聖心(みこころ)への深く特別な崇敬を持たれています。

(M・S)

神のために働き

そして地上で十字架を受ける人は

本当に幸い

―聖ラファエラ・マリア―

「主の御名を賛美せよ
主は命じられ、すべてのものは創造された」

(詩編148編5節)

キリストのみ心の慈しみを称える月も終わり、今ここに太陽の輝く季節を迎えようとしているこの頃ですが、朝唱える詩篇の祈りの中で、「宇宙の賛美」と題する次のような旧約聖書の詩篇(詩編148編)がいつも私の心を捉えるのです。

太陽と月は神をたたえよ。

きらめく星座は神をたたえよ。

大空は神をたたえよ。

雲はかみをたたえよ。

実に、神の創造のみ業を賛美するこの数行の詩は、私たちが壮大な宇宙の高みへと招くと同時に、私たちのこの地球にしっかりと目を向けさせるのです。

山と丘は神をたたえよ。

実を結ぶ木、すべてのの糸杉は神をたたえよ。

野のけもの、すべての家畜は神をたたえよ。

地をはうもの、翼ある鳥は神をたたえよ。

この小さな詩篇の祈りに出会った際に、神から創られたこの宇宙、この地球を大切に、世界のすべての人々とともに平和共存の世界が築かれますようにと祈らずにいられません。

文責：シスター前田 葉子